

animato

animato
VOL. 24
アニマート | Summer 2018

アニマート
animato とは、演奏記号に使われる言葉で、「生き生きとした」「活気のある」「魂のある」などの意味をもちます。

プロジェクトダイナミズム “つながりの連鎖がまちを変える”

組

織としての力を蓄えつつあるこ
まちぶらすには、いろいろなプ
ロジェクトの案件が持ち込まれてくる
そうです。

そのたびに「どうすれば本質的な解
決につながるのか?」「本当にやりき
れるのか」と皆でガチの議論で決め
ていくそうですが、たいていは、チャ
レンジすることになると話されていま
した。

そのチャレンジがまた内外の人や組
織を育て、共感の輪を広げまちを変え
ていくことにつながっていると思いま
した。

森

ノオトは、実はメンバーの想い
がなかなか一つにならないとい
う悩みがあったそうですが、お互いの
想いをじっくり聴き合う場を昨年 12
月に設けて以来、本音で語り合える
信頼関係のベースができつつあるそう
です。

よく組織基盤と言いますが、その大
切な要素に、「メンバー間の信頼関係」
があるとわかりました。

だから外部組織との連携において
も、立場を超えた語り合いができる環
境づくりに心を砕いているのだと思い
ます。

ま

ちのアートセンターを標榜する
アーモンドコミュニティネッ
トワークの「アーモンド・ホープセン
ター」（アーモンドの花言葉は、希望）
は、北山田駅前のビルの 1 階元カフェ
だった場所で、中が良く見えます。

ひきこもりの青年たちへの支援とい
う枠組みではなく、「自分の内面を表
現したい人」が集まる場所になってい
くことを目指しています。一人ひとりの
「〇〇したい」に本気で耳を傾け、
向き合ったときに新しい出会いが生ま
れています。これからの支援のあり方
を示している取り組みだと思います。

前号の反響

前号 (animato23 号) は、本業を通じて社会的課題に挑む地場企業を特集しました。

●ジバース、頼もしいですね。これから
の社会と一緒に考えるパートナーとして、
一緒に汗を流せる機会を作りたいと思い
ます。(NPO 職員)

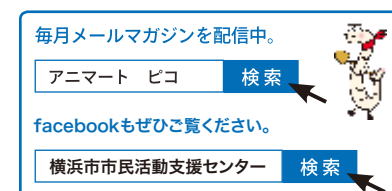
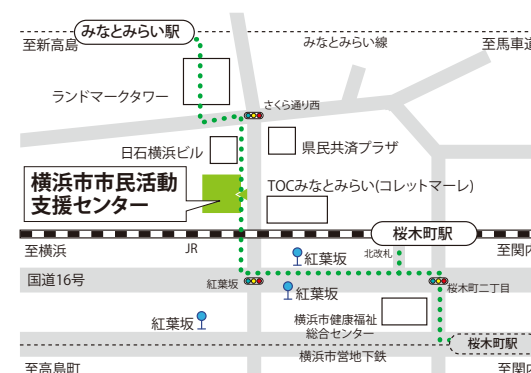
●企業の取組（社会貢献活動）がここま
で進んでいるとは、驚きました。そして
地元の企業の方なので、色々と情報交換
したいなと思います。(市民活動団体)

●CSR をやらなければ!と、大企業の報
告書を見て悩んでいましたが、まずは自
分たちで出来ることをやる。一歩踏み出
すことが大事なんだと気付かされました。
(企業・CSR 担当)

次号 Vol.25 は、12 月発行予定です。次号にも皆さまからの感想や反響を掲載します。
animato 編集チーム宛に、E メール (daihyo@hamacen.jp) にてお寄せください。(吉原・薄井・嶋田)

横浜市 Yokohama Citizens Empowerment Center 市民活動支援センター

管理運営：認定NPO法人市民セクターよこはま
https://opencity.jp/yokohama/
住所：横浜市中区桜木町1-1-56
みなとみらい21クリーンセンタービル4・5階
TEL：045-223-2666 FAX：045-223-2888
Email：daihyo@hamacen.jp
開館時間：月・土 9:00-21:00 日・祝 9:00-17:00
休館日：年末年始・第4日曜日（12月は第1・第4日曜日）
JR線「桜木町駅」北改札 徒歩5分
市営地下鉄線「桜木町駅」徒歩7分
みなとみらい線「みなとみらい駅」徒歩10分
発行日：2018年8月10日
デザイン・印刷：株式会社大川印刷





余白を考える

「関わりしろ」と「接触面」

横浜市市民活動支援センター 情報誌 animato 編集チーム

「関わりしろ」「接触面」という言葉を聞いて、どんなことを連想されますか？聞きなれない言葉ですよね。今号はこの2つの言葉が重要なキーワードとなります。

個人や一つの組織では解決できない課題に対して知恵を持ち寄ることで解決する。もしくは、事業の可能性を拡げ続けているプロジェクトを今号では特集します。

組織・立場を超えて出来ることを持ち寄れば、より大きな力を発揮できるのは明らかです。

しかし協働するためには、お互いを知ることから始まります。誰でも良いというわけではありませんし、進め方も大切です。

「関わりしろ」を考える

組織・個人の目標や思想が全く違い、各々の思惑だけでプロジェクトを進めたら、どうなってしまうでしょうか。

お互いを理解し、信頼できなければ、継続した関係を築くことは難しく、一時的にケミストリー（化学反応）が起こったとしても、割り切った関係になりがちで、長続きしません。

自分たちがやりたいこと、描いている未来を多くの方々と共有し、どのような関わり方が出来るのかを考え、「関われる余白」を作る。

その余白を情報誌 animato 編集チームでは「関わりしろ」と呼んでいます。

自分がどのように関われるだろうかを考えてもらうことが、相手を知ることや深い共感に繋がります。

「接触面」を作る

「接触面」を増やすということは自分たちと一緒に活動してほしい！と思う方に対して、関われる環境をつくり、伝えることです。

分かりやすくまとめると、「他者（他社）」と関わりを持てる余白をつくる」ということです。

余白をつくり、その後もしっかりと参加者同士の動きを見てプロジェクトをマネジメントする。

多くの方が関わるプロジェクトを成功させるための極意を今号は特集しています。

「接触面」を多く作ることで、「関わりしろ」を生む場面を増やすことができます。

ぜひ、自分の心に余白をつくって、ジブンゴトにして読んでいただけたら幸いです。

余白から生まれた新たなアイデアと共に、一步を踏み出しましょう。



ウェルカムベビーボックスとは

①赤ちゃんが産まれたご家族が無償で受け取れるプレゼント

戸塚区・鶴見区在住の赤ちゃんが産まれたご家族が申し込むと、無償でウェルカムベビーボックスを受け取ることができます。

②まちの人、企業のみなさんからの応援の気持ちを届けます

まちに住む人だけでなく、美容院、カフェ…モノはないけど応援したい気持ちのある企業のみなさん「Biz サポーター」からの想いも入っています。豊かな子育ての環境をみんなでつくっていきたいと考えたものの中から、各分野の第一人者の選考委員の皆さまが厳選したプレゼントがウェルカムベビーボックスに入ります。

2017年度は、470個のウェルカムベビーボックスが戸塚区内の赤ちゃんの生まれたご家族に贈られた。



参加の仕組み

- ①プロジェクトへの参加方法は、ウェルカムベビーボックスのプレゼント提供による参加
- ②協賛金での応援
- ③プロジェクトとの共同事業の展開の3種類

プレゼント提供による参加の場合は、選考会を経て、プレゼント（商品・サービス等）が「ウェルカムベビーボックス」として、赤ちゃんの生まれたご家族に届く仕組みだ。

※2018年度からは、横浜市戸塚区、または鶴見区在住の方が対象。（要申し込み）

「ウェルカムベビープロジェクト」の目的は、商品を届けることに終わるのではなく、地域で子育ての課題を共有し、それぞれの生活のなかで何ができるか知恵を出し合い、みんなで子育てするまちを実現すること。

共感してもらう場づくり

「ウェルカムベビープロジェクト」では、このウェルカムベビー

「生まれてきてくれてありがとう」 みんなの気持ちを赤ちゃん和家人に届ける ～ウェルカムベビープロジェクト～

運営事務局：NPO 法人こまちぷらす

ヤマト運輸株式会社神奈川主管支店

「生まれてきてくれて、ありがとう」横浜の景色が描かれた青いボックスの中には、赤ちゃん用のベビーソープやウェットナップ、手作りの背守り、商店会の方からのあたたかいメッセージ付き商品などが入っている。

この青いボックスは「ウェルカムベビーボックス」といい、赤ちゃん和家人を祝福する気持ちをこめて、地域の人々から贈るプレゼント。

プロジェクトの名前は、「ウェルカムベビープロジェクト」。

『地域で子どもを生み育てやすい、社会のあたたかい目』が欲しいという声に、何かできないかと考えたのが、横浜市戸塚区に拠点を置くNPO法人こまちぷらす。そして、その想いに対して呼応したのが、高齢者の見守り支援などを展開（宅配の際に無事を確認）しているヤマト運輸株式会社神奈川主管支店だ。両者は、横浜市が実施している「ヨコハマ市民まち普請事業」による「企業マッチング」を通して意気投合し、一緒に企画を練り、行政や地域の方々と協議を重ねながら立ち上げた民間主導のプロジェクトだ。



Welcome Baby
Project



ボックスに込められた「赤ちゃんを地域で歓迎する」というメッセージを発信しようと、地元商店会や企業の皆様に提案を重ねてきた。ボックスの中には、地域住民の皆さんが手作りした背守り※も入っている。

とつか背守り会は、本プロジェクトがきっかけで誕生。月2回、地域住民の方々が集まり背守りを縫っており、子どもたちへの想い（生まれてきてくれてありがとう）を伝えることができる、多世代が集まる機会となっている。

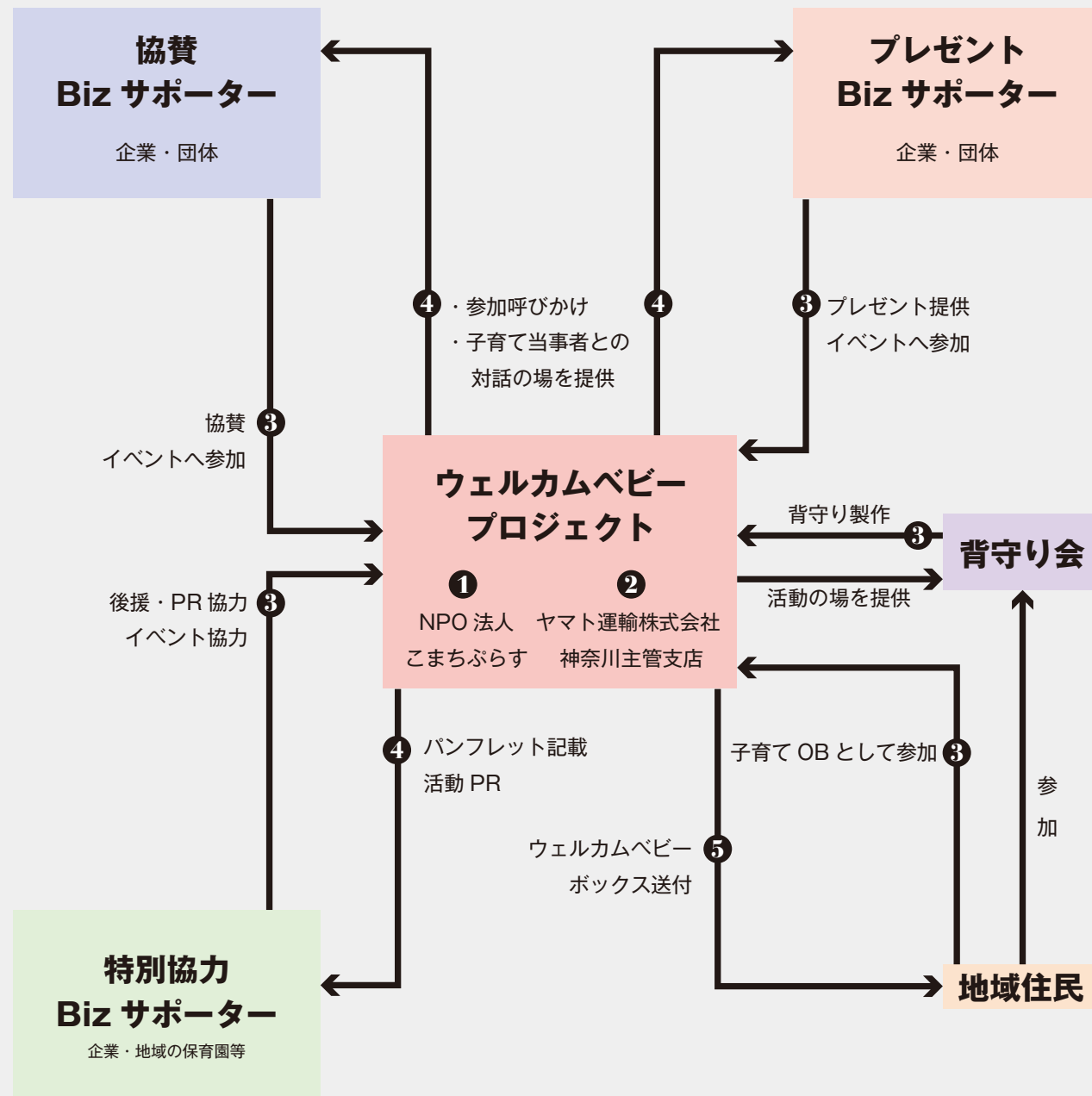


地域住民の方々が集まり、背守り制作中

※背守りとは：子供の健やかな健康を願って着物の背中に縫い付けた「お守り」。背守りは着物の背中に縫い目をつけ「背中から邪気はいらないように見守る」という意味が込められている。

写真：2016年度ウェルカムベビーボックス選考会

事業実施における連携・協働状況



- 『地域で子どもを生み育てやすい、社会のあたたかい目』が欲しいという声に対して、何かできないか検討。
- イベントにてヤマト運輸株式会社神奈川主管支店さんと出会い、ウェルカムベビープロジェクト 立上げ
- 当事者のニーズをひろうためのワークショップ開催。
- 企業・団体へ、プロジェクトへの参加を呼びかけ。
- プレゼント選考会を開催。応募の中から選考委員がプレゼントを厳選し決定！
背守りと一緒に、厳選したプレゼントをウェルカムベビーボックスへ。

プレゼントは
ヤマト運輸が
一つ一つ、梱包している



ワークショップの様子

選考会で選ばれたプレゼントはモノだけでなく、「タクシー会社からのお迎え料金1回無料サービスチケット」や「家事代行サービス2時間ご利用券（年間200名限定）」など、モノ以外の提供も多いことが特徴。地元からは「つか宿駅前商店会」有志による「参加店マップ」など、ちょっとしたふれあいのきっかけ作りができる「贈り物」もある。

「0歳児のママやパパのニーズをひろうワークショップ」が行われ、企業、NPO、大学、行政の垣根を超えた対話の場で、さまざまなアイデアが出された。直接、当事者の声が聴けるのが魅力でもあり、商品開発にも役立つ仕組みだ。

プロジェクトは、大きく分けて4つ

利用したことがきっかけで、応援する側に。子育てを応援する文化の醸成に向けたあたたかい循環を作り出すため、4つの事業を展開している。

①ウェルカムベビーボックスの

送付

参加している商店の方には、産後の孤立についてお伝えし、来店した際の会話につながる工夫を考えてもらっている。

②ウェルカムベビー自販機 & オムツ自販機の展開（2種類合わせて約20台）

一人のお父さんの「自動販売機におむつが入っていたら、どれだけ助かるか」という発言から生まれたオムツ自販機。プロジェクトに関わる企業が10ヶ月かけて開発した。

③プレママ・プレパパ講座（産院と協働・年4回実施）

過去に参加した方が出産後に赤ちゃんを連れてきて、プレママ・パパが抱っこできる機会をつくってくれた。

④ママ・パパ・赤ちゃんのためのほっとタイム（保育園との協働。年6回実施）

商店では、これまで縁がなかった子育て世代がお店に来てくれる

地元商店街の変化

ようになり、自分たちに出来ることを更に考えるようになったと話されている。

そして地元の商店会では、0歳児赤ちゃんのお出かけマップを作ると聞いて、授乳スペース、おむつ替えスペースを提供してくれることになった。

事務局感を出さない

「事務局が中心で進めるという雰囲気、このプロジェクトでは出したくありません。『自分だったら何が必要だろう？』『子どもが小さい頃、何に困ってたかな』等、ワークショップや対話の場を重ねて、プロジェクトに必要なものを一緒に考えてきました。このプロジェクトは、地域の皆さんと一緒に作ってきました。」事務局の細井さんは話す。

関われる方法を増やすことで、多くの共感を生み、活動を広めている同プロジェクト。

子どもに声をかける商店街の皆様の笑顔が、とても印象的だった。

NPO 法人 こまちぷらす ウェルカムベビープロジェクト事務局

〒244-0003
横浜市戸塚区戸塚町145-6 奈良ビル2階
TEL：045-443-6700（月～金 10：00～17：00）
MAIL：welcomebaby@comachiplus.org
ウェルカムベビープロジェクト HP：http://welcomebabyjapan.jp/
Facebook：https://www.facebook.com/welcombabyjapan/

地域と繋がり 「布の循環」をつくりだす 「森ノファクトリー」の挑戦

運営：NPO 法人 森ノオト

きっかけはモノづくりを通じたエコの発信

「森ノファクトリー」は、ブランドであると同時に1つのメディアなんです。商品を通じて暮らしの中のエコを伝えることを私たちは目指しています。」

寄付布を活用して、ものづくりが好きな女性たちの手仕事の場をつくり、布小物を製品化したプロジェクト、「森ノファクトリー」について話してくれたのは、NPO 法人森ノオト（以下森ノオト）代表の北原まどかさん。

地域に広がる森のファクトリー

「森ノオト」は、「暮らしのなかのエコロジー」を発信することをミッションにした組織。これまで、エコロジーをテーマにウェブメディアでの発信が事業の中心だったが、モノづくりを通じてエコロジーの価値を伝えていきたいと、「森ノファクトリー」を始めたという。



アブリケの商品の1つであるあずま袋。(提供：森ノオト)



県内各地から送られてきた寄付布の数々。それぞれの寄付布を吟味して組み合わせていく。

今「森ノファクトリー」は、森ノオトのスタッフの力だけでなく、地域の協力も得ながら、大きな拡がりを見せ始めようとしている。

「寄付布を地域住民から募り「布の循環」ネットワークを構築

プロジェクトの始まりは、2016年に森ノオトが開催した個人が持ち寄った布をパッチワークしてあずま袋をつくるワークショップ。地域に眠っている布を活かすことで、「素材同士が響き合うような組み合わせを考えるのは、布の世界での編集」だと、北原さんは感じたという。

そこで、森ノオトは地域の家庭に眠っている古布を集め、商品にしていくことを目的に、布のアップサイクル（いらなくなった物を新たなアイテムにつくりかえる）ができる布工房「森ノファクトリー」プロジェクトを始めた。

しかし、プロジェクトを始めるのと、古布だとシミや匂いなどが染み付いており、商品化が難しいこ

とが判明。そのため、未使用の反物や布といった寄付布を、森ノオトの拠点がある青葉区の住民を中心に呼びかけ集め、布小物に蘇らせるブランド、「AppriQue（以下アブリケ）」をスタートさせた。

いくつかのメディアに取り上げられた影響もあり、青葉区の住民だけでなく、県内各地から多くの寄付布を集めることに成功。寄付してくれた人は30人以上にのぼるという。

地域のお母さんを仲間、制作体制を充実

森ノオトのイベント参加者やウェブメディアの愛読者などから、ものづくりの仕事経験のある子育て中のお母さんをスカウト。森ノファクトリーの制作メンバーとして加わってもらうことに。

また、2018年から毎月裁縫講座を開催。参加者のなかには「私もファクトリーのメンバーになりたい」と活動に参加してくれるようになった人もいた。

森ノオトにとっては、「アブリ



森ノオトの事務所が置かれている森ノハナレ内にある森ノファクトリーの工房。地域のお母さんを中心に、日々新しい商品が制作されている。(提供：森ノオト)

アート×不登校支援

アートを軸に、困難を抱えた子どもの才能を引き出す場として発展

アーモンド・ でこぼこ 凸凹コミュニティアート・プロジェクト

運営事務局：NPO 法人アーモンドコミュニティネットワーク

「アーモンド・^{でこぼこ}凸凹コミュニティアート・プロジェクト」
(以下アートプロジェクト)は、不登校のひきこもりがちな子どもたちや、発達障がいなど発達に凹凸がある個性的な青年たちと、海外で活躍する日本人アーティストが繋がり、横浜の地域コミュニティで実施する芸術文化活動。
今密かに横浜の地で注目されているプロジェクトだ。



DIY 完成のお披露目を兼ねて、建物の命名パーティーを開催 (提供：森ノオト)



森ノハナレ DIY 中の様子。地域の大工さんと地域のお母さんの交流も生まれた。(提供：森ノオト)

「森ノファクトリー」の制作体制を充実させることができたと同時に、子育て中のお母さんにとっても、自分の感性や趣味を活かせる活動場所の確保にもつながっている。

企業やお店と連携し、 プロジェクトを拡げよう 挑戦

「森ノファクトリー」でつくりだされたブランド「アプリケ」は、住宅再生事業を手がける会社とコラボし、「暮らしと布のリノベーションワークショップ」と題したイベントを実施したほか、地元菓子店とコラボしてチョコレート包装を制作するなど、着実に地元を中心に認知され始めている。

また、森ノオウチの敷地内にあった空き家を新拠点「森ノハナレ」として、青葉台の工務店4社が集まりつくられた「青葉台工務店」と協力する形で改修。改修の際には、青葉台工務店が寄付した端材を利用し、壁張りや床張り、漆喰塗りなど、のべ120人以上の人がDIYを楽しんだ。1階は「アプリケ」商品の展示やフ

リースペースとして、2階が「森ノファクトリー」の工房として使われている。

「多くの人が携わるプロジェクトを成功させるには、人と人が本当に理解し合わなければならぬ」と語る北原さん。メンバー同士お互いがお互いの想いを聞き合う実践の繰り返しの中で、森ノファクトリーは、地域にプロジェクトの参画の輪を広げようとしている。

NPO 法人 森ノオト

〒227-0033

横浜市青葉区鴨志田町 818-3

TEL：045-532-6941 / FAX：045-985-9945

HP：http://morinooto.jp/

に通う子どもも含めて、ニュータウンの住民にも、自分の住む地域にアイデンティティを持ってもらいたかった」と水谷さん。地域住民が子どもたちと関わることで、できる場をつくり、切り絵のアニメーションを制作するなど、多世代が交流できる「関わりしろ」が生まれている。

アートプロジェクトを軸とした地域づくりの場へ

アーモンドコミュニティネットワークがアートプロジェクトを始めた理由について、「アートセンターとして場を作ること、場に参加する敷居を低くしたかった」と、水谷さんは説明する。

「一見、何の問題も抱えていないさそうな子どもが、実は生きづらさを抱えている場合がある」という。だからこそ、子どもたちが、自由に自分を表現し話ができる場として、アートセンターという場の持つ可能性は高い。

現在は、元JICAの職員など様々な職能を持った大人たちがボランティアスタッフとして青少年



アートプロジェクトについてお話しして頂いた、アーモンドコミュニティネットワーク代表の水谷裕子さん（写真左）と、現在イタリア在住のアーティストである牧田あゆみさん（写真右）

NPO 法人 アーモンドコミュニティ ネットワーク

〒224-0021
横浜市都筑区北山田 1-9-3 エキニワ北山田ビル
TEL / FAX : 045-594-7566
HP : <https://almondcommunitynetwork.com/>

事業に関わるようになったことにより、子どもたちが様々な大人たちと出会うことのできる場となった。

「困難を抱える子どもの多くは、不安を持って生きている大人の中で育つことが多いのです。その子たちに、活き活きと安定した生き方をしていく大人と出会わせる場が必要なんです」と水谷さん。

今、アーモンド・凸凹コミュニティ・アートプロジェクトは、子どもたちが、もともと持っている自分らしく生きようという力を引き出す場として、表現の場、出会いの場となっている。

**子どもたちの豊かな才能の
発見がプロジェクトの原点**

このアートプロジェクトを運営するのは、横浜市都筑区のNPO法人、アーモンドコミュニティネットワーク。アーモンドコミュニティネットワークは、長らく不登校支援の活動を実施している団体であり、高校生以上への青少年支援の拡充とより気軽に訪れることのできる敷居の低い居場所作りの必要性を感じていた。

プロジェクトのきっかけとなったのは、現在大学生アニメーターとなった青年Aさんへの支援。学校になじめなかった彼に、代表の水谷裕子さんが学習支援で関わっていた頃、「好きなアニメーションの仕事に進みたい」とデッサンや模写を独学で勉強するように。その様子を見た水谷さんは、イタリアでアート活動をしていた地元出身の牧田あゆみさんに協力を要請した。

子どもたちの才能を引き出す芸術文化活動を始めよう」と決意。「アーモンド・凸凹コミュニティ・アートプロジェクト」を始めた。

様々な困難を抱えた当事者を支援するプロジェクトへと成長

目の前の一人への支援として始まったプロジェクトは、その後様々な困難を抱えた子どもたちへの支援へと発展していった。アーモンドコミュニティネットワークの事業に通っている青年が書いた詩を見た水谷さんが、「この詩に絵と音楽をつけてみよう」と、牧田さんを通してイタリアの芸術学校の生徒を巻き込み、アニメーションや絵本が制作された。そのアニメーションの制作ではAさんが唯一のアニメーション技術者となって活躍した。

地域の民話を題材とした アートプロジェクトへと発展

アートプロジェクトの取り組みはさらに発展し、2018年には横浜市北部の民話をモチーフにしたアニメを製作。「アーモンド



アーモンドコミュニティネットワークの拠点の1つであるアーモンドホープセンターの壁には、数多くの子どものアート作品が飾られている。